㈣その他の体育活動の充実

陸上部　走る・跳ぶ・投げるという、あらゆるスポーツの基礎となる運動と取組むのが陸上部である。しかし、リレー以外は、チーム・プレーというよりも、むしろ個人プレーの色彩が濃い。しかも種目が多く、これが団体優勝のむずかしさに結びついている。本校の陸上部は、戦後、部員数に恵まれなかった年が多く、大きな大会での優勝経験はない。しかし、ときどきすぐれた選手が出て好成績をあげている。

県大会以上で一位になった選手の名をあげてみよう。昭和二十一年の畑山（一一〇M障害）、古川（一〇〇M・二〇〇M）、吉田（走高跳）。二十二年の吉田（走高跳）、斉藤（円盤投）。二十四年の滝波（四〇〇M）。二十六年の佐藤（一〇〇M・二〇〇M）、中川（槍投）、岩脇（砲丸投）。二十九年の太田（一一〇M障害）。三十二年の土村（走高跳）。三十六年の栃内（槍投）。三十八年の山田（一〇〇M）。三十九年の赤沢（槍投）。五十年の村上（四〇〇M）。なお、八〇〇メートル・リレーで一位になったのは、二十五年と二十六年、それに三十六年である。

高体連の総合記録は、二十六年が三位、二十九年が七位、三十八年が九位、三十九年が七位である。中でも二十五年から二十六年にかけて、佐藤・西野・中川・岩脇らの活躍がめざましかった。また三十八年から三十九年にかけては、山田と赤沢の両選手を主力に、各大会で数々の入賞記録を出した時期である。このあたりが、戦後の岩高陸上部の、第一次と第二次の黄金時代だった観がある。

庭球部　伝統を誇る本校庭球部の歴史にも、戦争による空白部があった。テニスは虐待され、コートはカボチャ畑と化したのである。したがって戦後復活した庭球部は、まずコートづくりから始めなければならなかった。ボールやラケットにも不自由したが、部員の熱意は強かった。

そして昭和二十三年から二十四年にかけて、最初の興隆期がやってくる。すなわち二十三年に、小原・北田組が県下中部地区高等学校庭球大会で優勝した。また村上・浅理組が、県下選抜高校庭球招待試合で勝利をおさめた。そして翌二十四年の県体で、村上・浅理組、兼田・猪瀬組、小野寺・熊谷組の本校チームが、みごと優勝をかちえたのである。宿敵盛高を決勝戦で破っての勝利だっただけに、その喜びはひとしおであった。

つぎの隆盛期は、二十七年から二十八年にかけてのころだった。すなわち、坂下・浦田組が、二年連続の県体優勝を実現した。なお、二十八年の東北大会で、同チームは三位を獲得している。

さらに三十三年には、阿部・名郷根組の名コンビが活躍し、県下高校庭球大会で優勝した。

そのあと、部員の精進にもかかわらず、しばらくの間雌伏期が続く。しかし、石川・藤原組が出現するに及んで、岩高庭球部はふたたび盛り上がりを見せる。三十九年の県高校庭球新人大会で二位になった同チームは、翌年の同じ大会で優勝し

人、天皇陛下にムラサキを差上げたこともその一つです。いたずらしていると、すぐ得意のピストルをつかう。この紳士、昼まえは『きみらは昼のべんとうニシンのおかずですか』と。エライこっちゃ。としよりのひやみずいものこあらえ!!

〔小林博先生〕よくぼんやりしている。この間、高三の人が先生の授業の時スーと一人ずつ逃げていった。いつも黒板に一人で書いたりしゃべったり、目をショボショボさせて『へへ』とおかしそうに笑うやさしいロッパさん、今年の予餞会の余興はハテ何でしょう?

〔菊地忠六先生〕どうして電話の応待が事務的なのでしょう。お国はどちら。通学証明、学割ああしんど。よくおこりますね。でもほんとうは心の温かい人だと思います。逆ボタルとは源平何れに属しますか。

〔村上照五郎先生〕本校出身の壮士、何時もエンマ帳をはなさず（誰かストーブにくべる勇者はなきか）授業の時はむっつりと教室中を見まわす。講義は盛岡弁で親しみ易い。

〔照井政夫先生〕授業中はにこにこ笑いながら眼鏡のあたりいなかの旦那さんを想わせる。小柄だがスポーツマン。肝心要の所で『以下同じ』の一声は眠けざまし、説明に力が入ると教室中がビリッとする。その度に頭の中にピンと数式が入ってくれればよいのだが……。

〔柏木重興先生〕体格に反比例して声や人柄等はポチャポチャとして愛すべき人。グレートな腹がすぐ目につく。学生時代

た。さらに四十一年の高校総体で、石川・藤原組は堂々の優勝をかざり、全国ランキングも三十二位という成績をあげたのであった。

篭球部　本校には、県レベルの大会での優勝経験を持たない部がいくつかあるが、篭球部もその一つである。しかし、これにはやむを得ない面がある。同部のもっとも大きな悩みは、ホーム・コートに恵まれず、講堂が使えないときは盛岡体育館や岩手女子高校・杜陵高校体育館などを借りて練習しなければならないことである。このため、シュート練習が思うようにできず、それがそのまま他校との実力差になって現れてきたきらいがある。

しかし篭球部員は、不自由をしのんで努力を重ねた。昭和二十一年に、県下中等学校篭球選手権大会で、早くも三位の好成績をあげている。二十二年には校庭にみんなでコートを作り、翌年校内篭球大会を開いて、バスケットボール層の拡大をはかった。二十四年から二十六年にかけては、県体や高校総体で二位の成績を収めた。その後昭和三十年代は、高体連には出場するけれども、一回戦か二回戦で敗れるという状態が続く。さらに四十年代になると、高体連への出場権さえ獲得できない年が多くなる。しかし、四十五年と四十六年は県新人戦に出場し、ベスト8入りは果たせなかったものの、かなりの健闘ぶりを示している。

ラグビー部　〝校技ラグビー〟といわれるように、当部の歴史は古い。男子校にふさわしい男性的なスポーツで、石桜精神をみがく上に大いにあずかって力があった。戦前、岩中・盛中の対戦は盛岡名物の一つであった。戦後もこの伝統が引き継がれ、二十一年九月の東北北海道大会岩手県予選でまず宿敵盛中と戦い、6－0で勝利を手中にした。さらに盛工を21－0の大差で破り、秋田で行なわれた東北北海道大会に駒を進めたが、惜しくも秋工に敗れた。二十二年と二十四年には、国体県予選で優勝するとともに、東北予選ではいずれも秋工につぐ二位の成績を収めている。

その後一時勝運に見放されていたが、二十七年の県体で優勝し、二十八年には高校総体と県体で二位を占めた。そして二十九年は、国体県予選二位、高校総体二位の戦績をあげるとともに、全国高校ラグビー選手権大会県予選を勝ち抜き、同北東北予選でも石巻高と抽選で雌雄を決するという健闘ぶりを示した。

三十年と三十四年の高校総体で二位になったあと、しばらくの間雌伏期が続き、ラグビー部の黄金時代を知る人々をさびしがらせた。しかし、四十七年の県体でBブロックの二位となり、〝校技ラグビー〟復活のきざしを見せた。

体操部　数ある運動競技の中でも、体操は岩高のお家芸に属する種目である。戦後ほとんど毎年のように、高校総体・全日本選手権県予選・県体・国体県予選などで、団体優勝ないしは二位入賞を果たしている。個人の受賞記録も、枚挙にいとまがないほどである。水泳部とともに、本校体育部の両横綱といわれるゆえんである。

にはラグビーの選手だったというが、丸くころがってトライをしたのでは……。スキーもなさる。仇名はトビラ式にいうならば動物。（ヒント、キツネの親類）

〔小笠原哲治先生〕ごそごそいたずらする者には内職はやめろといい、話をすると大変叱る。（そういう者になりたくない！）写生している姿はゆったりしているがにらまれるとこわい。『こっちをみなさいこっちを』とはぼくたちを注意するアゴさんの大の言葉。

〔池野礼子先生〕町で出会うと『オス』と挨拶する先生だけあって、授業中友達の名を平気でよびすてにする女傑。宿題を見るのが大変面白いそうだがくそっおれ達の気持を考えろといいたくなる。こわれたスリッパの音が何となく頭にひびく。

〔伊藤甲逸先生〕この先生確かに人がよろしい。一時間に『あぁ』と十五回以上もいう。ダンス用の靴をはいているともいうが、冷かすと赤くなる。叱っている時も叱られた気がしない。万事親切である。

〔猿橋英一先生〕あの有名なる長い髪、芸術家気取りである。どこかベートーヴェンに似ている。仲々手まね口まねがお上手で問題を提供してまちがうと『うそお!!』と叫ぶ。先生髪を切りなさい。不潔ですよ。

〔鈴木健郎先生〕ズックをずたりずたりひきずって歩く。いつもねむそうに無表情だ。女性的、仲々〝コマ〟い先生である。その顔が、時々少しほころぶ所が気

いま、新人大会を除く各種県大会で、団体一位になった年をあげてみると、昭和二十三年、二十四年、二十七年、二十八年、二十九年、三十二年、三十三年、三十四年、三十五年、三十六年、三十七年、三十八年、三十九年、四十年、四十四年というにぎやかさである。

県大会で二位以上の成績を収めた選手の名を、各年度ごとにたどればつぎのようになる。二十一年の三浦。二十二年の鳴海。二十三年の鳴海、吉川。二十四年の吉川、杣、小林、斉藤、中村、四戸。二十五年の小林、斉藤。二十六年の村上、小森。二十七年の村上、佐々木。二十八年の高橋、遠藤、鈴木、三浦、菅森。二十九年の小林、小沢。三十一年の佐々木。三十二年の五日市、佐々木。三十三年の五日市、戸塚、阿部、四戸。三十四年の菊池、米沢、柴内、佐々木。三十五年の米沢、菊池、佐々木（克）、佐々木（健）。三十六年の米沢、佐々木、菊池、園田、高橋。三十七年の園田。三十八年の木村、根本。三十九年の田村。吉田、藤島。四十年の根本、吉田、田村、館沢。四十一年の館沢。四十二年の高野。四十三年の高野、村上、松井。四十五年の細川、松井。四十六年の大森、照井。四十七年の大森。

この輝かしい歴史を誇る体操部も、ここ数年鳴りをひそめている観があるが、部員の奮起を大いに望みたいところである。

スキー部　かつて幾多の名選手を輩出したスキー部も、戦後の昭和二十年代は、どちらかといえば目立たない存在だった。しかし部員は岩山・姫神山をはじめ各地のスキー場で練習を重ね、実力をつけて行った。三十年ごろからは部員もふえ合宿も本格的になり、県下高校スキー大会や県民スキー大会などでしだいに頭角を現すようになった。たとえば、三十五年以降の県下高校スキー大会における総合順位とおもな活躍選手に注目すれば、三十五年が七位（矢羽々、織田、荻野、大竹など）、三十六年五位（山本、八幡、角舘）、三十七年四位（山本、三浦、八幡、高橋）、三十八年五位（山本、高橋、佐藤）、三十九年六位（高橋、松本、小笠原、高橋）、四十年五位（松本、狭沢、小田、山口、吉田）という状況である。

その後、やや沈滞ぎみの時期が続いたが、四十九年に県下高校スキー大会の男子総合で九位を占めたり、五十一年一月の県民スキー大会七〇M級純飛躍競技で中野選手が二位になるなど、岩高スキー部再興のきざしが見えはじめている。

柔道部　柔道は剣道とともに、戦前は重要な体育教科であった。石桜会にも発足当初から柔道部と剣道部があって、それぞれ大いに活躍した。戦後、占領軍からの指示により、武道は一時禁止されていたが、昭和二十六年に講和がなり、日本が独立を回復するとともに、ふたたび盛んになってきた。

本校にも、まず柔道クラブができた。そして二十八年度からは、正式に柔道部が復活した。そのときの部員は高三の三上、高二の鷹觜・吉田など、中学と高校を合わせると、総勢四十余名にも達した。さらに三十年度以降、柔道が体育教科の一部

に入った。ザルという仇名は誰も由来を知っていない。〝ジャジャマツガッタ〟事書いだな！

〔古川七郎先生〕先生らしからぬ先生だ（貫録がほしい）。要するに純情である。いつか体育の時間にある生徒がおだてたり冷かしたりしたら『おめえおれをなめる気か』と来たのにはかなわなかった。

〔武田英俊先生〕仙台弁のまき舌で生真面目ないい方をする（ニックネームは教えてあげません）。一帳羅の背広でボクシングでもやりそうな赤黒い顔が大きく目立つ大器晩成型。信頼出来る人。

〔川合るみ子先生〕どんぐりころころどんぐりこ――良いお声ですね。いかにも女の先生らしい心遣いを持っていて板書はうまい。先生御結婚はいつです？　仇名『三等身』。

〔平野哲郎先生〕若白髪がいっぱい。目立たぬ縁の下の力持ちの十四年間無理もありませんね。先輩とはかくありたいもの。いつも静かだが皮肉もいう。どうしてお止めになったのかわからないのだ。

〔中村嘉明先生〕愛すべき我々の先生。説教というものを知らないらしくあまりしない。バレーはずい分うまかったそうだ。写真は三度の飯より好きだという純情教師である。

〔吉田長作先生〕長作さん、仲々よい名だ。よく服を取り替え、頭はいつみてもスパッとしている。家では真黒くなって働くそうだ。女にもてるのは生まれつきらしいとは定説。

〔西在家寛先生〕チョットした学者タイ

に取り入れられるにいたった。

こうした背景のもとに、柔道部はどんどん実力をつけ、有段者の数をふやしく行く。新人戦、市民体育大会、県民体育大会、高体連などの大会でも、着実に上位に進出するようになった。三十九年と四十年には、県体で連続優勝をとげた。しかし、高体連での団体優勝だけはなかなか達成できず、年々柔道部の悲願とされた。そしてついに昭和四十二年、高体連での初優勝が実現する。

個人戦などでめざましい活躍をした選手をあげれば、三十六年の佐藤・佐々木、三十七年の川原、三十九年の高田・川村、四十年・四十一年の島川、四十二年の三上、四十五年・四十六年の工藤などである。

剣道部　剣道部も柔道部同様、戦後の空白期のあと、剣道クラブとして再スタートを切った。そして昭和三十年には、高体連で小笠原（勝）が個人二位となり、県体兼国体予選で小笠原（公）が個人二位になるという好成績をあげた。これが実績となって、翌三十一年度から正式に、石桜会剣道部として復活することになる。

その剣道部は、当初苦難の道を歩んだ。しかし三十年代の後半になると、市内に敵がなく、県下でも一、二位と評価されるまでに成長した。三十七年の県下新人大会で初優勝をとげたのを皮切りに、三十九年には県下高校選抜国体兼東北大会二次予選で二位を占め、東北大会に出場している。この年は、高体連でも三位になった。

四十年代に入り、剣道部から、個人戦での入賞者が続々と出る。四十二年の県体で個人二位になった高橋をはじめ、四十三年の新人大会で個人一位になった工藤、四十四年の県体で個人一位になった中村などである。

その後も、四十五年に高体連三位、四十六年に県体二位など、岩高剣道部の活躍が続く。最近数年は部員数の不足に悩んでいるが、近い将来、輝かしい伝統が開花する時期を迎えるに違いない。

卓球部　卓球部の歴史は古く、すでに昭和五年に、盛工と対戦して勝利を収めた記録が残っている。戦後の復活は昭和二十一年四月であるが、その後の約三十年間の奮闘ぶりたるや、まったく〝すばらしい〟の一語に尽きる。数々の制覇記録を有する水泳部・体操部などに匹敵する偉大な足跡を残してきた。これも、部員が猛練習に猛練習を重ねた成果であろう。ことにも、三十年代以降の活躍がめざましい。高校総体で団体優勝をなしとげた年だけをひろってみても、昭和三十八年、三十九年、四十年、四十二年、四十七年の五回を数える。このうちの、四十二年と四十七年は、いずれも全国高校総体団体十六位の地位を獲得している。その他の各種大会を加えると、ほとんど毎年のように、何らかの入賞記録を達成してきたといえる。

シングルスに、またダブルスに、県レベルの大会で二位以上の好成績をあげた選手の名を列記してみる。二十二年の昆。二十三年の藤沢。三十五年の兼平、細川。三十六年の籠屋、高井、藤倉。三十七年の立花、斉藤。三十八年の佐藤、兼平。

プ。アゴの出ている人は発音がうまいとか。彼の学級では非常に評判がよい。確かにマジメでシンセツである。だがあまり試験をやりすぎるのが玉に傷なそうだ。

〔山中順三先生〕上級生からオッカナイ先生と聞いて期待していたらとても愉快な先生である。ペルシャネコとおっしゃるそうだが由来を聞いたら舌をペロペロ出すくせからとか、だが一回もおめにかかったことがない。校長さんになっても授業して下さることが我々の願いである。

〔武田彩吉先生〕一人で疑って一人で解決するといったチョット変ったおもしろい先生。身なりはきちんとして頭の禿を隠そうと二、三本の毛を往復させている。国語の先生だけに話の仕方が上手で手振り身振りはたいしたもの。

〔千田助治先生〕エライ先生だ。あのお年でヒマさえあれば勉強している。英語の本もごらんになるそうだ。老いて益々盛んなりけりである。教室では『ヤルンダヨ』『ヤラナキャダメナンダヨ』がお好きで連発する。愛称は乃木大将。ピッタリしますね。

〔遠藤貫中先生〕眼鏡をかけた顔付は仲々トボケていらっしゃるがドウシテドウシテ怠け者はあの眼鏡が一番こわいという。六年間徒歩で皆勤、その早足は有名である。愛称はカンチュサン、授業中のアヤスイ標準語が交ると『ボクは歯が悪いんでねえ』とは怪しいもんだ。

〔日野岳浩先生〕部隊長さん、一見会社の重役タイプにみえる。物すごい蛮声の授業は兵隊時代の話で退屈しない。鼻を

三十九年の佐藤、兼平。四十年の佐藤、兼平、佐々木、新里。四十一年の佐々木、新里、松村、村上。四十二年の松村、村上、佐々木、佐藤、下河原。四十三年の佐藤、下河原。四十四年の四役、天坂。四十五年の熊谷、佐々木。四十六年の坊屋鋪、小原、佐々木、熊谷。四十七年の熊谷、藤島、吉田。五十年の田村、大久保、沢田などである。

排球部　バレーボールは、非常に大衆的なスポーツでありながら、奥が深い。これがいまや、日本の国技の一つになった観がある。しかし本校排球部の黄金時代は、昭和二十年代の後半から三十年代の前半にかけてであったようである。

戦後の二十一年と二十二年は、県下排球選手権大会で二位となり、二十五年には高校総体で二位を占めた。そして二十六年の高校総体で、はじめて優勝を手中に収めたのである。このときのメンバーは、前衛が戸帳・立花・村上、中衛が蒲沢・谷藤・野村、後衛が藤原・上川・藤沢であった。さらに翌々年の二十八年に、再度高校総体で優勝した。メンバーは、前衛が戸張・泉沢・藤村、中衛が田上・蒲沢・広田、後衛は豊川・有原・釜沢・沢口・佐々木・晴山であった。

その後、三十一年に高校総体二位、三十二年と三十三年に県体二位の戦績を残したが、しだいに部員不足に悩まされるようになり、三十五年から三十八年まで、私学親善球技大会で四連勝したものの、三十九年の高体連三位を最後に、大きな試合での上位進出が果たせなくなっている。今後、何とか奮起してほしい部の一つである。

送球部　送球部が誕生したのは、昭和二十四年である。以後二十九年まで毎年、高校総体の決勝戦にまでは進むが優勝できず、惜しくも二位に甘んじる年が続いた。しかし、三十一年はいつになく部員の志気が盛り上がり、東北大会への出場権を獲得した。仙台で行なわれたこの東北大会において、準決勝で山形代表寒河江高を8－3で退け、盛岡一高との決勝戦に持ち込んだが、6－7の僅少差で敗れ、優勝を逸した。その年のメンバーは、GK前川、FB太田、小山田・鈴木、HB藤村・松岡・下平・工藤、FW中里・宮野(主将)・小野寺、SB山田であった。

その後三十四年の高校総体で二位となり、四十二年の県体でも二位になった。しかし近年は部員の確保がむずかしい状態であり、不振をかこっている。熱意のよみがえる日が来ることを、心から望みたい。

アイスホッケー部　あらゆる運動競技の中で、もっとも男性的でスピーディーなのが、アイスホッケーだといわれる。この競技に関して、本校はスピードスケートとともに戦前からの古い歴史を持ち、岩中黄金時代を築いてきた。とくにアイスホッケーの場合は経験豊かなOBが多く、戦後の立ち直りも早かった。その活躍舞台も県内にとどまらず、夢は全国制覇にあった。

夢はまだ実現していないが、それにかなり近づくことができたのは、昭和二十七年と三十五年の二回だった。まず二十七年は、県下スケート選手権兼国体予選並びに東北スケート大会予選で、宿

なでながら笑うところは河馬にそっくりオットこれは失礼。

〔会計の赤石久太郎先生〕外ではヨチヨチ歩いているが金庫の前に座るとしゃんとなり周囲に安心感が漂う。こういう人に政治をやらせたら汚職もなくなるでしょうね。

〔足沢至先生〕アニキという感じ、世話好きの性質で誰からも親しまれる。愛称はタルッコだがこれはあまりよくない。山椒さんとでもつければ面白いんだが。医者の着るような上着を着ると菓子屋の小僧さんにそっくり。

〔小使の高橋清一さん〕いつもやさしい小使さんである。人がよくおまけに仕事は熱心であるので誰にも好きがられている。お得意のラッパをききたいもんだね。仇名は「ラッパさん」。

〔小使の阿部新蔵さん〕朝から晩までいそがしい。時々晩に赤くなった顔をみかける。お酒が好きらしい。仇名を募集します。

敵盛岡一高を押えて優勝し、国体への出場権を獲得した。そして日光で開かれた国体スケート大会に参加し、一回戦で全東京を下し、二回戦苫小牧工高に敗れはしたものの、三位決定戦では慶応高校を7－6と退け、全国三位となった。このときの選手は、FW藤原・佐藤・中村・北田・高松・広田・立花・石川(宗)、DF淵沢・中野・高橋・佐々木・GK石川（富）・久保田であった。

また三十五年は、県下高校選手権大会に優勝して全日本高校選手権大会への出場権を得、長野県で開催された同大会で、第一戦不戦勝、第二戦愛知に勝ち、第三戦は釧路湖陵高校に敗れた。続く三位決定戦で作新学院高と対戦し、苦杯を喫したが、全国四位の座は確保した。この年度のメンバーは、FW似鳥・上山・広瀬・潮田・藤原・長尾・佐々木・小林・荒川、DF桐生・飯塚・庭田・鈴木・平子、GK藤井・田中であった。

こういった伝統を持つアイスホッケー部であるから、県内制覇はいわば日常茶飯事のようなものだった。県下高校選手権大会での優勝は、二十九年・三十年の二連勝をはじめ、三十三年から三十五年までの三連覇、さらに三十七年の優勝を間にはさんで、三十九年から四十三年までの五連覇などと、向かうところ敵なしの状態であった。惜しいことに、最近は以前のはなやかさからやや遠のいてはいるが、厚いOB層を背景に、ふたたび雄飛するときが必ず来るに違いない。

スピードスケート部　アイスホッケーにくらべると、スピードスケートの復活は少し遅かった。その活動が再開されたのは、昭和三十年からである。竹花・宮野・武田の三人が最初のメンバーだった。しかし数年のうちに急速に部としてのまとまりができ、年間を通しての計画的なトレーニングを重ねるにつれて、実力のある選手が生まれるようになった。

県下高校選手権大会における総合成績をふりかえってみると、三十二年一月の大会では四位、三十三年から三十七年までの五年間は連続三位であったが、三十八年・三十九年・四十年はいずれも一位で、みごと三連覇を達成している。このころが本校スピードスケート部の最盛期で、翌四十一年は総合五位に落ち、四十三年に三位までカムバックしたが、以後は見るべき成果をあげていないのが惜しまれる。

スピードスケートのいずれかの種目で、県大会二位以上の好成績をあげた選手名をつぎにかかげる。三十五年の藤原。三十七年の杉江（全国高校対抗五千M五位、国体五千M四位、同一万M二位）三十八年の杉江（全国高校対抗五千M四位、同一万M二位、国体五千M一位）・鈴木。三十九年の鈴木・藤岡・長瀬。四十年の小笠原・佐藤・長瀬・二上。四十一年の小笠原などである。

山岳部　山岳部にとって、山だらけの本県に位置を占めていることは、大きな強味だといえる。岩手山・早池峯山・駒ケ岳・八幡平・姫神山などの、練習に格好な山々に囲まれている。しかし、この点は県内他校にもあてはまることで、とくに岩高山岳部が輝かしい実績をあげている理由につ

「青年の主張」スタートのころ

いまでも毎年、NHKが主催して「青年の主張」コンクールが開かれている。そのはじまりは昭和三十年で、NHK放送開始三十周年記念として開催された。当時はまだ順位をつけない方式であり、伝統ある本校弁論部が岩手県代表のような形で意見を発表し、その声が盛岡放送局の電波に乗った。

録音は、同年十一月十八日に、合同教室で行なわれた。何もかもが目新しい経験で、放送局員の合図どおりに拍手させられたり、途中でベルの音が入って大いにあわてたりしたものである。弁論部の大星雄三、角掛勝彦、佐藤和平、菊地光男、千葉勝之の五人が出場し、「指導者に望む」「こんなことは社会から無くしたい」「青年として反省すること」の三題の中からテーマを選んで、各自の体験から生み出した信念を述べた。この録音が翌十九日に県内に向けて放送され、反響を呼んだ。元岩手日報編集局長の小野昌次は、しっかりした主張内容でありあらためて現代の青年を見直したと講評した。

翌年からは、岩手県予選を経て全国大会に進む形がとられるようになり、三十二年にはふたたび岩高講堂が会場になった。本校弁論部の水準の高さを裏づけるできごとであった。

いては、それ以外の要因をも合わせ考えなければならない。つまるところは、部員が他校以上に努力しているということであろう。

本校は創立以来、岩手山と密接なつながりを持っている。具体的には、校旗樹立とその記念碑の建立、例年の全校岩手山登山などがそれである。したがって、学校ぐるみで登山を重視する伝統が早くから培われていたといえる。昭和二十一年に山岳部が再度創設されたとき、部員数が百名を越した事実も、この伝統があったからに外ならないと思われる。マンモス山岳部は、いくつものパーティーに分かれて、県内のいろいろな山に親しんだ。昭和二十四、五年ごろまでは、このような状態が続く。

二十年代の後半になると、山岳部のあり方に変化が生じた。登山器具が出まわるようになり、部員もロッククライミングなどの高等技術と取り組み出した。国体に選手を派遣したいという気持も芽生えた。そして部員が淘汰され、三十年には二十数名程度の規模になる。いわば、量から質への転換が行なわれたのであった。このころに、はじめて積雪期の岩手山登山が試みられている。

三十年代以降、岩高山岳部は、国体県予選や県体で、優秀校の仲間入りをするようになった。ことにも三十四年は、県体登山競技の最優秀校に選ばれた。翌三十五年は、高校総体に新しく登山競技が加えられた年である。本校選手団はさっそく最優秀パーティーとなり、幸先のよいスタートを切った。以後、高校総体や県体で優秀パーティーに選ばれた年をたどると、三十六年、三十七年、四十八年、四十九年、五十年である。中でも五十年は、第十九回全国高校登山大会でも優秀パーティーの地位を獲得しており、石桜会の各運動部が近年不振ぎみなときに、少なくとも山岳部は万丈の気を吐いているのである。

(五)文化活動の充実

出版委員会　出版委員会の前身は、草創期から続いた会誌部である。毎年石桜会誌「石桜」を発行してきたが、昭和二十二年には、校内新聞へも手を広げた。ガリ版刷りの校内新聞を四回発行するとともに、何度か文芸座談会を持つなど、文運興隆への旺盛な意欲を示した。

二十四年十二月の石桜会改組にともない、会誌部は新設の新聞部とともに、出版委員会を構成することになった。その新聞部（当初は石桜新聞会と称した）が、年度がわり直前の二十五年三月五日に、タブロイド版四ページ活版刷りの「石桜新聞」創刊号を出した。当時の出版委員会委員長は佐藤章であり、副委員長は佐藤祐司（編集部長兼任）・高橋実の両名であった。そしてこの創刊号が、同年の県下学校新聞展示会で第一位に入賞しできばえのみごとさを第三者からも認められる結果になった。

以後、会誌「石桜」ならびに学校新聞「石桜新聞」が、本校発展のために貢献した度合は、まことに大きなものがある。これによって、職員・生徒・父兄の相互理解が深まり、学園の志気が一段と高揚したといっても過言ではない。昭和三十年

ラッパさんの死

本校使丁の〝ラッパさん〟こと高橋清一さんが、昭和三十三年三月十八日、脳出血のため自宅で亡くなられた。修学旅行に同行して帰った直後の、突然のできごとであった。

高橋さんは昭和六年八月ラッパ手として採用され、以後足かけ二十七年間も勤務した、文字通り岩中・岩高の歴史とともに歩んだ人である。いつも明るくほがらかで、その人柄のために全生徒から愛され、親しまれた。

高橋清一さんは、昭和二十九年二月発行の石桜会機関誌「石桜」四十九号に、「校長四代に仕えての思い出」と題する一文を寄せている。その最後の部分は、つぎのようなものであった。

「大沢川原の旧校舎でもう一つ忘れがたいのは、秩父宮様本校御視察に御出でになられた時だ。昭和十一年頃と思う。其の頃殿下が弘前の軍隊に御勤務なさって居られた時だ。殿下を御迎えする其の時の多忙さは、又格別だった。御迎え申す日は、全員校門に整列、校長や自分は先頭に位置して敬礼の際、君が代のラッパを吹奏したあの時の光景、また光栄に存じて忘れ得ません。

と三十一年に、「石桜新聞」が二回も続けて岩手日報主催の県下学校新聞コンクールで最優秀賞を得たのも、本校の学校新聞が右の機能をよく果たしていることへの評価だと思われる。

演劇部　昭和二十四年四月に創設された演劇部は、毎年校内芸術祭や予餞会の花形として活躍するとともに、市内高校演劇連盟研究発表会でもつぎつぎに力作を披露し、岩高の声価を高めた。

とくに三十三年十月には、民放八社主催東北・北海道学生放送劇コンクールの岩手県予選に応募し、一位を獲得して県代表になっている。そのときの作品は、演劇部自作の「牛（べこ）」で、演出斉藤敬二、効果堀間敬、演出台博克ほかであった。この作品は、同年十一月、鳴子温泉で開かれた東北予選でもみごと一位に入賞し、文部大臣賞はじめ民間放送連盟賞、岩手県教育長賞など、数々の受賞記録をうちたてた。さらに翌三十四年二月には、丸善主催の全国学生放送劇コンクールに参加して、岩高演劇部の「牛」が最優秀作品賞に輝いたのである。

なお四十一年十一月にも、高橋克彦作の「三つのりんご」が、岩手県高校生ラジオ作品コンクールで一位になり、東北・北海道コンクールでは四位を占めたほか、演技賞も獲得している。

映画部　映画部が発足するに際し、生徒が不良化するのではないかと、大分問題になったといわれる。昭和二十一年四月のことである。以後、校内から映画批評文を募集したり、講演会を開催したり、「石桜新聞」紙上で名画を解説するなどの活動を展開した。三十年には、甲子園に出場した野球部の熱戦ぶりを十六ミリ映画にとって上映した。三十五年には、機関紙「映画ファン」を発行している。また五十年度の石桜祭で、映画部製作の劇映画を上映し、好評を博した。

書道部　書道クラブが書道部に昇格したのは昭和三十一年四月である。クラブ時代の全国大会入賞記録としては、浦田隆が代表者だった二十八年度に、全国学生書道展へ高校七名中学八名が出品し、全員入賞の偉業を達成したのが光っている。翌二十九年七月に開かれた山形県立天童高校主催の書道競書大会では、熱海宏佶が銀賞を獲得し、南黒沢実が入選した。

部になってからは、三十三年八月、全日本学生美術展覧会の書道半紙の部に出品した菅原国嘉の作品が、金賞に選ばれた。また、広瀬勉が部長をしていた四十年十一月、大東文化大学主催の第七回全国学生書道展に部員六名が出品し、一名が特選になったほか、全員が入賞するという快挙をなしとげた。

英会話部　本校ではじめて校内英語弁論大会が開かれたのは昭和二十五年一月であるが、その四カ月後に英会話部が誕生した。そして二十六年二月には、岩手中・高等学校主催、新岩手日報社後援で第一回県下中学校英語学芸会を開き、岩手中学校が英語劇で一位になった。

英会話部がめざましい活躍ぶりを見せたのは

そして殿下は、職員の会議室に御休息なさった。本校では此の会議室を御成記念室として永久に保存する目的で、わざとその棟だけ、今の新校舎の真中に移して建てたのである。思えば、今の高三Aの教室である。此の事も永久に忘れがたい。新校舎に移ってから戦争が始まって何かといそがしさが増した。

戦争最中の頃から、時局柄、ラッパ手の資格が自然と失なわれた。なんと云っても、佐々木校長の代、一生忘れ得ぬ光栄に浴した事がある。

昭和二十六年十月、本校創立記念の大行事が行なわれた。其の記念式に当って、永年勤続者、校長先生始め先生方が表彰された其の後に続いて、本職も、二十年の永続故表彰された。当日式場に長官始め大勢の御偉方の直前で理事長に進み出て状に添え重い記念品を頂いた。あの事は、一生に二度得がたい事だと今も思っている。

其の他佐々木校長時代の思い出は数限りがない。」

三十四年から三十六年にかけてであった。すなわち、三十四年十月の県下高校英語弁論大会で里見一栄が二位になり、十一月の第十一回高松杯全日本中学英語弁論大会中央大会に県代表として参加した中学の鈴木邦彦が、上位入賞を果たした。

三十五年九月、県下高校英語弁論大会で、その鈴木邦彦が一位、県下高校英作文コンテストで里見一栄が二位、県下中学校英語暗唱大会で高橋瑛至が二位になったほか、十月の県下中学校英語弁論大会では、畠山巌が二位を占めた。

さらに翌三十六年九月の県下高校英語弁論大会では、鈴木邦彦がふたたび一位になって、二年連続優勝の記録をうち立てた。また、県下中学校英語暗唱大会において、杉下安弘が一位の栄冠をかち得たのである。

音楽部　昭和二十一年四月にできた音楽部が二十三年に新任の生内義夫教諭を部長に迎えて男声合唱の実力を飛躍的に伸ばし、グリークラブとして校内外で大いに活躍したことについてはすでにふれた。生内教諭は、二十五年四月に離任・上京後も、帰省時には音楽部を指導して、二十六年の雫石救済音楽会や創立二十五年記念行事での発表などを成功させた。

その後一時部員不足に悩みながらも、県下でもめずらしい男声コーラスグループとしてその声価を高めるとともに、校内ではレコードコンサートを催すなどして、学園に音楽の火をともし続けて行った。

三十年代の音楽部の課題は、NHK主催の全国唱歌ラジオコンクールに出場し、入賞することだった。初参加の三十四年には市内予選を通過したが、県代表にはなれなかった。翌三十五年の県大会では、優良校七校の一つに選ばれている。そして三十八年九月の県大会で四位進出を果たし、努力賞を獲得した。

四十年代後半あたりから、音楽部はフォークソングに力を入れるようになり、文化祭のステージ発表で好評を博している。

絵画部　小笠原哲治教諭の存在を抜きにして、絵画部の歴史を語ることはできない。昭和八年から四十五年までの三十七年間本校の美術教師をつとめるとともに、絵画部の部長として指導に当り多くの弟子を育てた。三方がガラス窓の絵画室で絵筆をとる師の真剣な姿は、それだけでも部員の芸術への意欲をかき立てる力を持っていた。

絵画部の例年の活動は、高校野球や運動会のマスコット作り、文化祭（石桜祭）での展示、校外美術展への出品などであるが、写生会や絵画旅行を行なった年もある。校外美術展におけるおもな入賞記録をひろうと、二十三年の市内高校美術連盟第一回発表展で、西村正樹が美術連盟賞を受賞。

彼は翌二十四年秋の芸術祭参加県下学童展高校の部でも、堂々芸術祭賞を獲得している。同じ年に開かれた市内高校美術連盟第二回発表展では、菊地真一郎が日本美術会賞を得た。

部史上最大の快挙は、四十年一月、上野美術館で開催された全国学生美術展で、村上誠の努力作「赤い塔」が特選に輝いたことだった。この絵は

寮歌できる

〝積慶〟〝重暉〟〝養正〟の校訓（三綱領）にちなんで命名された本校の寮の歴史は古い。このうち積慶寮は昭和二十七年二月に惜しくも焼失したが、重暉・養正の二寮は、その後も多くの寮生を迎え、送り出して来た。

寮には年中行事がある。新入舎生歓迎会、クリスマスパーティー、送別会などである。そのような集会のときに、校歌以外にも何か合唱できる歌がほしいという希望が寮生の間から出て、昭和三十七年に寮歌ができた。作ったのは、当時の舎監だった戸嶋正夫教諭である。舎監は自分の学生時代の寮歌のメロディーに、つぎのような歌詞をつけた。

楽しい入浴のひととき

猛勉もあり

その後石桜図書館に飾られ、後輩たちを励まし続けている。なお村上誠は、現在も活発な創作活動を展開している。

現在美術界で活躍している近藤一彦、佐藤祐司、宇津宮功なども絵画部のOBであり、さらにそれに続く画壇の新人がひしめいている。

写真部　戦後の二十一年四月に写真部ができてから、部員はいろいろな行事があるたびに愛用のカメラを持ってかけつけ、部費の外に自費までつぎ込んで記録写真をとり続けた。二十五年度から三十年度まで、絵画部と合併して〝美術部〟と称していたが、三十一年度からふたたび写真部として独立した。

写真部の代表的な活躍舞台は文化祭（石桜祭）であるが、スピード写真を手がけたり、部員の作品を伸ばしてパネルで展示したり、教師や先輩に出品を依頼するなど、例年工夫をこらしている。化学室の一隅をベニア板で仕切っただけの一坪の暗室が部室である。顧問の中村嘉明教諭は、本格的な個展まで開いている写真家であり、近藤一彦というすぐれた先輩もいるので、部員の抱負は大きい。

物理部　昭和二十一年四月、文化部の一つとして科学部が誕生した。その後、部の中に物理班・化学班・生物班・地学班が作られた。各班が独立の部に昇格したのは、三十二年度であった。

物理班時代の大きな研究テーマは、気象観測とラジオ組立などだったが、部になってからはアマチュア無線に力を入れるようになった。全部員が国家試験に合格することを毎年の目標にし、たとえば、三十四年の文化祭にはさっそくアマチュア無線を公開し、見物人の目をひいた。学校のクラブ・ステーションを開局するのも大きな努力目標だったが、これも三十四年度に実現した。

ふだんは校内放送を受持つとともに、文化祭ともなればロボット、ウソ発見器、タイム・トンネルなどの不思議なしかけを公開する物理部は、地味ながら愉快な存在である。

化学部　化学部も他の理科関係の各部同様、ふだんは地味な存在である。しかし、文化祭には、年々水準の高い発表を行なってきた。たとえば二十八年の無機定性分析、三十二年の味の素・石けんの製造実験（中学部員）、三十六年の二酸化マンガンの研究、三十七年の尿素樹脂研究、四十四年以降の水質調査などである。なお化学部は、三十四年に機関紙「ランプの友」を出し、その後何回か発行している。

化学部員は、ユーモア精神においてもすぐれたものを持っている。文化祭の余興、〝爆発実験〟に、それがよく現れている。すでに二十八・九年ごろから人工火山の実験を公開し、亜硫酸ガスの悪臭で見学者をへきえきさせている。この伝統が四十六年にも受け継がれ、〝ミニ水爆〟の登場となった。ある先生などは、この爆発実験を見て、子供のように大よろこびをしたものである。

生物部　生物部の前身は、草創期の科学会博

寮　歌

一、仰げ秀峰　岩手富士
　わが石桜の学園は
　目ざす標を　桜花
　匂わせ果てぬ　花の色
二、御代は昭和の　初め頃
　自治啓我の　旗あげて
　星霜ここに　四十有余
　礎固く　築かれぬ
三、自由の夢に　人は酔う
　眠れる魂を　さまさんと
　われさきがけて　獅子吼する
　正義の叫び　ここにきけ
四、つきぬ流れの　中津川
　文化の光　寮に冴え
　共に鍛えん　この青春を
　讃えて学ぶ　わが寮舎

戸嶋舎監は、歌を歌えても楽譜が書けない。そこで、舎監がテープに吹き込んだメロディーを、当時の寮生で音楽部の主将であった細谷地祐助が楽譜に書き写し、それを全寮生に配って練習を行なった。以後、事あるごとにこの寮歌が歌われ続けて現在にいたっている。

物班である。戦時中は博物園芸組と称し、戦後は博物部となった。

一時部員が少なくなって、科学部の中の生物班となったが、三十二年に生物部として独立した。

生物部の部史には、輝かしい記録がいくつかある。まず三十一年六月に、生物班は駒ケ岳でクロサンショウウオを発見した。これを研究材料として使い、さらにモリアオガエルとイモリをとりあげ、古谷、三浦、金野の三名がそれぞれの発生観察を行なった。この観察結果を、日本動物学会東北支部大会青少年部（古谷、金野）と、東北高等学校理科研究発表会（金野）で発表し、高い評価を受けた。金野浩はさらに翌三十二年十月、県科学教育振興委、県教委、県高校理科教育研究会ならびに読売新聞社の共催で開かれた初の県学生科学コンクールにも「イモリの発生」で応募し、高校の部の最優秀賞に選ばれた。

また三十三年から、谷藤、武藤、菅野の三名が「早池峯山の蘚苔植物相の研究」に着手した。その後谷藤の退部、下舘・米倉の参加と、メンバーは変ったが、三年にわたる採集と研究を積み重ね三十五年十月に「早池峯山蘚類植物相の研究」として読売新聞社主催の県下高校科学コンクールに出品、優秀賞を受賞した。この研究を受け継いだ米倉公一は、三十六年一月、岩手県高等学校理科研究発表に提出し、優秀賞を獲得した。

生物部がこのような輝かしい業績をあげることができたのは、ひとえに顧問の小山真一郎教諭の熱心な指導のたまものであった。右の外にも、小山教諭は「盛岡地方の鳥類の分布」「ハナカジカ・エゾウグイの研究」などのすぐれた研究を、生物部員に手がけさせている。その在任期間は、二十六年四月から四十一年三月までであったが、退職後は本校名誉教諭に就任した。

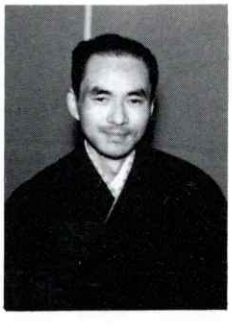
地学部　地学部の楽しみの一つは、大自然と語り合える野外活動である。科学部地学班時代から毎年岩石採集を続け、貴重な標本を少しずつふやしている。とくに、盛岡市近郊の岩石分布と地質についての調査は、長年の積み重ねがあるだけに充実している。

年度によって調査の重点地区を変えているが、実例をいくつかあげると、三十年の岩手山、三十二、三年の繋地区、三十九年の八幡平、四十年の大船渡（化石採集）、四十二年の雫石（同）。四十七年以降の好摩地区（地質中の花粉調査）などである。

また、天体観測も随時行なってきた。

郵便友の会　郵便友の会（ＰＦＣ）の信条は「私達は、文通により世界の人々と親しみを深めて平和な世界を築きます」「私達は、文通により広く知識を求めて教養を高めます」「私達は、文通により気の毒な人々を慰めて暖かい社会を作ります」の三つである。

本校に郵便友の会ができたのは、二十六年二月で、中心となったのは遠藤政治であった。以後市内はもとより、県内でも重要な役割を果たす会に成長した。ＰＦＣ全国大会へも、たびたび代表者を送っている。三十三年と三十四年には、海外文



村上昭夫

昭和五十年四月二十九日、盛岡市高松一丁目の盛岡市立図書館構内で、村上昭夫詩碑の除幕式が挙行された。凝灰岩の前面に、「私をうらぎるな」という詩を活字体で刻んだ黒御影石をはめ込んだものである。村上の才能を認めた詩人・村野四郎が作品を選び、また草野心平が題や〝村上昭夫碑〟などの文字を書いている。

賢治以後、岩手が生んだもっとも才能豊かな現代詩人と評される村上昭夫は、旧制岩手中学校の十五回生である。昭和二十年三月に本校を卒業後満州に渡り、敗戦の結果シベリアで三カ月の抑留生活を送った。帰国後盛岡郵便局に勤務したが、昭和二十五年春、二十三歳のとき発病、以後四十三年十月十一日に国立盛岡

通の指定校に選ばれた。また三十七年の全国大会では、優秀校として表彰された。さらに三十八年PFC第一回盛岡郵便局長賞を受賞するとともに前PFC顧問の坂本悟郎教諭が、仙台郵政局長賞を受賞した。

吹奏楽部　本校にブラスバンドが初めてできたのは、三十二年五月であった。高校のメンバーが徳田栄以下八名、中学は二人だけという少人数でのスタートだった。全員新米なので校歌や応援歌も満足にできず、「君が代行進曲」がやっと演奏できるだけだった。

以後指導者がいないこと、メンバーが少ないこと、楽器の数がそろわないことなど、多くの困難をかかえながらも、根気よく練習をくり返して行った。野球・ラグビーその他各運動部への応援、運動会や文化祭での演奏、各種音楽発表会への参加など、場数を踏むうちに、年々技術が向上してきた。

四十年代に入り、菊地治雄教諭を顧問に迎えてから、「岩高サウンド」が出るようになった。そして、コンクールへの挑戦がはじまる。ついに念願がかない、全日本吹奏楽コンクール岩手県大会Cクラス（二十人編成）で最優秀校に選ばれたのは、四十四年九月であった。さらに四十七年九月には、同大会Bクラス（三十人編成）での最優秀校の座を獲得した。その後も岩高ブラスバンドはすぐれた技術を保持し、今日にいたっている。

㈥長年の長髪禁止を解く

生徒の頭髪について、えりや耳にかからない程度の長髪を許可する方針がうち出されたのは、昭和四十四年の三月である。それまでは、短髪の伝統が守られていた。

旧制岩手中学のころ、坊主刈りは当然のこととされた。何しろ軍人の頭がそうであり、社会的にも若者は短髪にすべきだという風潮であった。戦後、新制岩手中・高等学校として再出発した際、改めて生徒の短髪が規則として制定された。物資が窮乏し、制服をそろえることなど思いもよらない時代であり、せめて頭髪だけはきちんと短かく刈って清潔にしようという声が、生徒の側から持ち上がったといわれる。

しかしその後、長髪問題をめぐって、ささやかな自由をかち取ろうとする生徒側と、あくまでも規則と伝統を守らせようとする学校側の間に、長い対立の歴史が続くことになる。たとえば昭和二十六年に各クラス別に賛否を論議したところ、一Cだけが短髪を是とし、ほかはすべて長髪を認めるべきだという意見にまとまった。この結果を持ち寄って、六月に石桜会の総務・生活合同委員会が開かれた。席上顧問の教師から提案があり、PTAとも相談した上職員会議で結論を出すことになったが、結局このときは、長髪許可の方針は出なかった。

当時の石桜会会長は八重樫昌宏であったが、彼自身は時代を先取りして、すでに個人的に長髪を

療養所で没するまで、肺結核との闘いが続いた。

その間、昭和二十四年ごろから詩作を始め、四十二年九月に、唯一の詩集である「動物哀歌」を出版した。これがその年の土井晩翠賞に選ばれ、さらに翌四十三年三月には、現代詩人にとって最高の栄誉とされるH氏賞を受賞した。

村上は晩翠賞受賞記の中で、「死の眼鏡をかけて、耐えがたく、つらく悲しい旅を……」と述べている。死と直面した詩人の魂は、かなしく、しかし鋭く輝いている。また山中順三校長に対して「先生、石桜精神で頑張っています」と告白する強い精神力の持主でもあった。

四十一歳の生涯は短かく、その死が惜しまれてならない。だが、詩人は魂の叫びを残した。その珠玉の作品は、永久に人々の胸を打ち続けるであろう。

死の1年前に出版された珠玉の詩集

実施していたのである。この長髪族の八重樫に、二十六年度前期の石桜功労章が授与されているのだからおもしろい。さらにその年の十一月三日に創立二十五年式典が挙行され、その際、来賓の一人は、「諸君の丸坊主が気に入った」と話している。生徒代表として祝辞を述べるなど、重要な役割を受け持っていた八重樫も、さすがにこれには参ったとみえて、「石桜」誌第四十八号に「丸坊主のみがほめられたとしたなら一つの問題であり皮肉ではあるまいか」と書き、反骨精神の旺盛さを示した。

それから七年後の昭和三十三年には、生徒の間に長髪許可を要求する署名運動が持ち上がった。ほとんどの生徒が署名したけれども、残念ながら責任者の氏名が明記されていなかったため、その効果は薄かったようである。ところが、さらに七年後の四十年になると、今度はより本格的な署名運動が展開されている。中心になったのは三Aだったようで、石桜会会長工藤和夫をはじめ、藤岡範夫、中坪正、斉藤健一、肥田敏比古、古山明広などが責任者であった。このときは、「石桜新聞」も大いに肩入れし、かなりの紙面をさいてこの問題を報じた。しかし山中校長は、署名を集めるには学校の許可が必要だ、無断で行なった署名運動は違法行為であり、断じて認めるわけには行かないと、生徒の要求を拒否した。

たかが髪の毛の問題ではないかといってしまえばそれまでであるが、生徒にとっては、学校側が個人の自由を認めるか、それとも高圧的な態度でそれを弾圧するかという基本姿勢に連なる重大事に思えた。また学校側としては、学園の規律を保持するためには、短髪の伝統を遵守するのが望ましいという判断を下していた。さらに、いわゆる六〇年安保闘争のころからにわかに学生運動が活発になり、その影響が一部高校にも及ぶという昭和三十年代以降の社会情勢が、学校側に必要以上の警戒心を抱かせた面があったかも知れない。

しかし四十年代に入ると、全面的に高校の長髪がごく当り前となり、盛岡市内の高校で短髪を守り通しているのは本校だけになった。そして、この問題にも、いよいよ決着のつけられる時期が訪れた。昭和四十三年度後期の石桜会幹部は、会長が山田公一、副会長が小山田義行・桑原伸行の両名、書記が楢山義彦・吉田豊の両名という顔ぶれであったが、このときの石桜会執行部が山中校長とねばり強く話し合いを重ね、ついに頭髪自由化の許可を得たのである。その間の事情を、山田公一は「石桜新聞」紙上で、つぎのように報告している。

頭髪自由化について

終戦直後の先輩が石桜精神の一つの形として短髪を行ったのだが、近年その再検討を望む声が強くなって、我々も数度校長先生と話し合った結果、先生としては生徒会の力量を信じて許可して下さった。三月十五日の事であった。今後我々は自由化されたことによって悪い気風が出て来ないようにしなければならない。

こうして、短髪の伝統に終止符が打たれた。最

昼火事で二教室を焼く

昭和四十八年二月九日午後三時四十分ごろ　本校〝前校舎〟の西はじ二階にある、三年A組の教室のまきストーブ付近から出火した。火は天井を伝い、隣の三年B組に延焼、木造の校舎であり、しかも空気が乾燥していたので全焼が心配されたが、発見と同時に盛岡消防署は市内の全ポンプ車を動員する第三出動をかけ消火に努めた結果、防火シャッターにさえぎられたこともあって、二教室を焼いただけで、同午後四時二十分鎮火した。この火事で、消火にあたっていた三年A組担任の足沢至教諭が、左手などに一週間程度の軽いやけどをした。

この日は三年生が期末テストで午前十一時半ごろまでに下校し、出火当時は教室にだれもいなかった。別の教室では、一、二年生が七校時の授業中だったが、全員ぶじに避難し、生徒のけが人はなかった。出火の原因は、漏電か、ストーブの火の不始末と判断された。なお、翌日以降の授業は、平常通りに行なわれた。

近世間では、若者たちの間に超長髪が流行しているようである。若者にとって、髪の毛の問題は、いつまで経っても切実な関心事なのであろうか。

(七)中学募集の停止と再開

大正十五年の創立以来、岩手中学校は〝岩中〟の名で親しまれてきた。戦後の学制改革に際しては、新制中学校として存続するとともに、新制岩手高等学校も併設され、その一貫教育は高く評価されるにいたった。だが中学校が義務教育化したことと、ひところのベビーブームが過ぎ去ったことなどが重なり、志願者数はしだいに減少の一途をたどって行く。

昭和四十三年度には、定員を一挙に二十名に減らし、英、数・国は中三のときに高校課程に入るなど、徹底した英才教育にふみ切った。その結果中三でありながら、高一の学研実力テストで全国三十五位にくい込んだ三浦由太の例も出現し、学業面ではめざましい成果をあげた。

しかし、中学への出願状況は、四十三年度十四名（うち七名合格）、四十四年度十二名（十二名合格）、四十五年度は八名の志願者に対して合格者なしという状態にたちいたった。そしてついに四十五年十一月、翌四十六年度から岩手中学校の募集を停止する旨の断が下されたのであった。当時中二だった影山亘理は、この決定についての感想をつぎのように語っている。

「朝礼のとき校長先生から正式に発表された。うわさには聞いていたが、ショックであった。中学時代の後輩がないとはさびしい。もし募集再開ということもなければ、わたしたちが最後の岩中生となるが、歴史ある岩中の最後の生徒として有終の美をかざりたい。」

教職員や在校生はもちろんのこと、同窓生の間にも、〝岩中〟の名前が遠からず消え、六年間の一貫教育体制がくずれるのを惜しむ声が高かった。だが社会情勢の変化はどうしようもなく、四十六年度・四十七年度・四十八年度と、中学の募集は停止されたままだった。

そういったときに、昭和四十八年七月、遠藤貫中教頭が校長に就任した。遠藤校長は本校の第一回卒業生であり、〝岩中〟に対する愛着も人一倍強い。そこへ三田理事長から、岩中復活の指示があった。こうしてついに、同年十二月二十六日、中学の募集再開が本決まりになったのである。

「岩中は多くの卒業生を出している学校でありぜひ復活させたい。授業料は徴収しない。岩中、岩高と六年間の一貫教育が本校の精神である。ゆくゆくはその上に短大もつくりたい。」というのが、理事長の構想であった。

この新構想のもとに、四十九年度から、岩手中学校の生徒募集が再開された。その四十九年度の入学者が十一名、五十年度十六名、五十一年度は十五名と、人数こそ少ないが、関係者の大きな期待に見守られて、元気に通学している。

ケイビングクラブ

岩泉の龍泉洞、安家洞をはじめ、本県の地下には大小無数の鐘乳洞が発達している。この地の利を生かし、進んで未知の世界を探ってみようとするグループが昭和三十九年に発足した。菊池正志、難波保夫、谷藤広二、小笠原政司、藤沢誠吉などを先駆者とする岩高ケイビングクラブがそれである。高校生としては、おそらく世界最初のクラブではないかといわれる。

ケイビングクラブの攻撃目標は、もっぱら岩泉地区に集中した。ことにも氷渡洞には三十九年以降たびたびアタックを試み、四十二年に人跡未踏の最奥部をきわめた。四十四年には岩泉町主催、岩高ケイビングクラブほか後援の、全国高校ケイビング大会が開かれている。

ケイビングクラブを部に昇格させようという動きが、四十年代を通じてしばしば表面化した。ついにその夢は実現せず同好会のままだったが、中村嘉明教諭の好指導もあって、活動そのものはなかなか活発であった。ジャーナリズムの取材対象にもなった。クラブ員は年々の成果を「石桜」紙上に〝可愛い子ちゃんの故里〟シリーズとして発表し、ロマンとユーモアに満ちた軽妙な文章が好評を呼んだ。